
1人の巫女と不思議な力

ユーリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

1人の巫女と不思議な力

【NZコード】

N0391C

【作者名】

コーリ

【あらすじ】

朝風理沙と美希達の、ちょっとした友情の話。ハヤテや神父のりインも登場します。

(前書き)

執事！

それは仕える者・・・

執事！！

それは傳^{かし}ぐ者・・・

執事！！！

それは主の生活全てをサポートする、フォーマルな守護者・・・

そう！

これは1人の少女のため・・・

命をかけて戦う1人の少年の、超コンバットバトルストーリーなのである！！

だが・・・

今回、そのメインヒロインであるお嬢様の三千院凪^{さんせんいんナギ}と、彼女のメイドであるマリアは出ない。

なぜなら・・・

今回の主人公は、生徒会3人娘の1人、朝風理沙^{あさかぜりさ}だからである！！

彼女の名前は朝風理沙。

私立白皇学院に通う、ごく普通の女子高生だ。

理沙の実家は、少しばか有名な神社である。

要するに、彼女は巫女さんなのだ。

ただし、理沙には鷺之宮伊澄のような能力はない。

彼女は、お祓いの類で精一杯なのだ。

で、今日理沙は何をしているのかといふと、休みで一日中ヒマなので、実家の手伝いをしていたのである。

朝風理沙

「フウ・・・実家の手伝いも疲れるな・・・」

理沙は今、巫女服姿で神社の庭を掃除していた。

理沙

「しかし、実家の手伝いは楽しい。それに比べて白皇学院の生徒会の仕事は大変だ。ヒナは人使いが荒いからな・・・」

このヒナというのは、生徒会長の桂ヒナギクの事である。

「こつもれうこつ風に生徒会の仕事をしてくれればいいの……」

理沙

「どわあああああつ……？」

理沙は驚いて振り向いた。

「と、生徒会長が言つてましたが……」

理沙

「なんだ、伊澄さんか……」

そう、彼女がわざと説明した鷺之宮伊澄。

悪靈を除靈する能力を持つた、スゴい少女だ。

・
方向音痴（しかも途中で目的地を忘れる）なのがタマにキズだが……

理沙

「しかし、今日は来るのが随分早いな？こつもならもう少し遅かつたが……」

鷺之宮伊澄

「今日ここに来る途中で彼女に会つたので、こじままで案内してもらいました。」

理沙

「彼女？」

「初めまして、ソニア・シャフルナーズです。」

沙理

あらわしの・・・

彼女の名前はソニア・シャフルナーズ。

テロリストを船に侵入させたり、父の仇として三千院家に復讐しようとしたシスターだ。

ちなみに今は改心しており、三千院家の執事ともたまに交流している（麻雀でだが）。

「で、シスターがなぜここに？」

ソニア・シャフルナーズ

「ああ、それは・・・彼女からケラスマートかこの神社にいると聞いたもので、挨拶に来ようかと・・・」

理沙

ソニア

„ԱՐԴՅՈՒՆՈՒԹՅՈՒՆ”

理沙

伊澄・ソニア

「？」

数分後、そこには理沙と同じく巫女服に身を包んだ伊澄とソニアの姿があった。

伊澄

「こんな姿ハヤテ様に見られたら、恥ずかしい・・・」

伊澄は下を向いている。

ソニア

「へへ・・・これが巫女服かあ・・・」

それに比べて、ソニアは落ち着いている。

理沙

「どうしたのだ？」

ソニア

「実はこの前、ハヤテ君の執事復帰のための指導で電車に乗っていた時、ナイフをちらつかせる不審者を退治したんですよ。その時、その男が『オレは巫女さんの方が萌える』と言っていたので、どんな服なのか気になっていたんですよ。」

理沙

「ホウ・・・・マニアな表現をするヤツがいたものだな・・・と、りあ
えず、庭掃除を手伝つてくれたまえ。」

伊澄

「はい。」

ソニア

「了解です。」

理沙

「フウ・・・・」

理沙がホウキでせつせと庭をはいていると、目の前に怪しげな男が
2人現れた。

ザツ！

理沙

「？」

「お嬢ちゃん、オレ達ちょっと道に迷つちまつてさあ。」

「ちよつと道案内してくれないか？」

理沙はこの2人の発言に、いたさか疑問を感じた。

理沙

「なぜ私に道を聞く？」この神社に来る途中にもたくさん人はいただ
る「つー」

「（鋭いお嬢ちゃんつすね、兄貴……）」

「（「このお嬢ちゃんを狙おうとしてる事、バレてるんじゃないだ
うな？）」

そう、この男達は以前三千院ナギを誘拐して綾崎ハヤテに倒され、
ワタルをさらうつもりでサキを誘拐したがソニアに倒された、あの
誘拐犯2人組である。

理沙

「まつたく……用がないなら私は向こうに行くぞ？仕事が忙しい
のでな。」

そう言って、理沙は向こうに行こうとした。

「チツ、いりなつたら仕方がねえ……」

理沙

「え？」

「力づくでも一緒に来てもいいぜ……。」

そう言って、2人組は理沙の腕をつかんだ。

ガシツ！

この時ようやく理沙は悟った。

この2人組は悪者だと・・・

理沙
「ちよつ、キヤツ・・・」

ソニア
「何してるんですか、あなた達はーーー！」

ザツ！

「ーーー」

ソニア

「あら？あなた達は確か・・・」

「チツーーー！」

2人組は急に走り出した。

ソニア

「大丈夫ですか？理沙さん。」

理沙

「あ、ああ・・・」

伊澄

「どうしたんですか？」

タタタ・・・

ソニア

「今、2人組の不審者が・・・」

伊澄

「不審者?」

理沙

「あ、そういうふうに忘れていた・・・」

伊澄

「何をですか?」

理沙

「今日、後数秒で泉と美希がここに来るのを・・・」

伊澄

「え?」

ソニア

「そういうふうに忘れてました・・・」

伊澄

「何をですか?」

ソニア

「あの2人組、以前ワタル君をさりげなくしてサキさんを誘拐した
誘拐犯達ですよ。」

伊澄

「・・・」

しばしの沈黙。

次の瞬間、伊澄の怒りが爆発した。

伊澄

「どうして、そういう事を先に言わないんですかーっ！…！」

理沙

「ス、スマーン！…」

ソニア

「ゴ、ゴメンナサイイ！…」

伊澄

「といつ事は、今頃泉さんと美希さんは…・・・」

「キヤーッ！…！」

ソニア

「なんですか、この悲鳴は…？」

理沙

「この悲鳴は、美希だ…！」

お決まりの展開である。

伊澄

「 嘘うそじょり… 」

タタタ・・・

理沙
「 泉！… 」

瀬川泉
せがわいすみ

「 あ、理沙ちゃん！伊澄ちゃんも…それともう一人・・・誰？ 」

ソニア
「 シスターをしているソニア・シャフルナーズです。 」

泉

「 ジゃあソニアちゃんだね って、そんな事言つてる場合じゃないよ…美希ちゃんが変な2人組にさらわれたの… 」

理沙

「 アチャヤー、やっぱりそつが・・・ 」

ソニア

「 あそこで倒しておけばよかつたですね・・・ 」

伊澄

「 とつあえず、泉さんは警察に電話を… 」

泉

「わかつたよ！でも理沙ちゃん達は！？」

理沙

「私達は今から2人組を追いかける！美希がさらわれたのは私達のせいだからな。」

泉

「でも、あの人達車使つてるんだよ！…ビビりやつて追いつくのよ！？」

理沙

「そ、そつか…」

ソニア

「大丈夫ですよ。」

ピポパボピピ…

パチン！

ソニア

「今ハヤテ君に私達の現在地をメールで伝えました。彼ならすぐに来てくれますよ。」

理沙

「そつか。美希、待つてろ！必ず助けに行くからなー！ー！」

「オオオオオオ・・・

美希は今、2人組の車の中に監禁されている。

美希は手足をキツくロープで縛り上げられ、後部座席に座らされていた。

花菱美希
はなびしみき

「オマエ達、どういうつもりだ！私を誘拐したりなんかして！…子供を誘拐したら重い罪になるという事は、知ってるのか！？」

「知ってるぞ。現にオレ達はすでに2回も誘拐をしてるからな！…」

原作ではナギとワタル（実際はサキ）で2回誘拐をやつてます。

美希

「フン、バカ共が…私を誰だと思っている！内閣総理大臣経験者の孫娘、花菱美希だぞ！…こういう事をするからには、それなりの覚悟を…」

「へエ…オマエ、政治家の娘か…」

美希

「そうだが、なんだ？」

「今日はついてるぞ、弟よ！今まで金持ちのお嬢様を誘拐して執事に倒されたり、ガキを誘拐しようとしてメイドさんを誘拐してシスターに倒されたりと運がなかつたが、今回はついてる！今回はか弱

「どうな娘の上に、誰も邪魔するヤツがいねえーー！」

「だよな兄貴！一緒にいたヤツだつてか弱くて、何の役にも立ちやしねえーー！」

美希

「（執事といつのは、ハヤ太君の事だな・・・）泉をバカにするなーー！」

「あー？」

美希

「それに、まだ私には理沙がいる！それにオマエ達を一度負かしたその執事とも知り合いだーー彼らが来たら、オマエ達なんかあつといつ間に倒されるだろーー！」

「つぬさい小娘だなーーおい、弟！ソイツの口を塞いでおけーー！」

「わかつた。」

ビーッ！

美希

「あ、何をする・・・むぐーーーーー！」

ペタッ！

美希は口にガムテープを貼りつけられた。

美希

「ん~、ん~……」

「やはり、手足を縛つただけではしゃべるからひぬせこな・・・」

「これで少しばかになつたな。」

美希

「ん~、ん~・・・（クソオ・・・口を塞がれてしまった・・・こ
れじやあ声が出せない・・・私、今大ピンチだな・・・こんな時、
ヒナならどうするんだろう？ そつにえは、ハヤ太君がナギちゃんの
お弁当を届けに来た時、ヒナと話をしてるのを見たなあ・・・確か、
『言つてくれれば助けに行く』と言つていたつけ・・・あれつて、
誰に対してもそうなのだろうか？ うん、そうだろうな。私が助けを
呼べば、ハヤ太君も来てくれるだろう・・・だが今は口が塞がつ
ている・・・それなら、心の声で叫ぶまでだ・・・頼む、私を助け
てくれ・・・ハヤ太君、理沙・・・）」

その頃、ハヤテは理沙達のところにたどり着いていた。

ちなみに泉は警察に向かっている。

あやさきヤテ
綾崎颯

「じゃあボクは今から花菱さんを助けに行きますが・・・朝風さん、
伊澄さん、シスター。ついて来ますか？」

理沙

「 もひるんだ。」

ソニア

「 彼女がさらわれたのは私達のせいですから・・・・・」

伊澄

「 ではハヤテ様、行きましょうか。」

ハヤテ

「 ええ。 では伊澄さん、背中に。」

伊澄はハヤテの背中に乗った。

ハヤテ

「 では、朝風さん達も・・・・・」

そう言つと、ハヤテは理沙とソニアを抱きかかえた。

ガシッ！

理沙

「 ちよつ・・・・・」

ソニア

「 ハヤテ君！？」

ハヤテ

「 今から自転車で追いかけたのでは、追いつくのは難しいです。ですから・・・空を飛んでいきます。」

理沙

「え？」

ソニア

「ハヤテ君、今何で・・・」

ハヤテ

「しつかり捕まつてくださいね！疾風の^{ハヤテ}・・・」

「ダンッ！」

ハヤテは空中に飛び出した。

理沙

「う、うわあああ～っ！」

ソニア

「キ、キャラアア～ッ！」

今ハヤテは、空を飛んでいる。

ソニア
「スゴいスピードで飛んでるハヤテ君！ 空を飛んでますよー。」

理沙

「もののスピードを出せる必殺技だと以前泉から聞いていたが、

まさか空を飛ぶ事もできるとはな・・・

伊澄

「こつの間にこれだけの進歩を・・・

ハヤテ

「ええ、その手のプロに教わったんですよ。最初は空中制御も難しかったんですけどね。」

ハヤテに空の飛び方を教えた人物というのは、以前教会でハヤテや伊澄が出会った幽霊神父、リイン・レジオスターの事である。

リイン・レジオスター

「（つましく使えているよつだな。）」

ハヤテ

「（ええ、おかげさまで。）」

リイン

「（君は覚えが早い。）」（今まで早く使っこなせたのは君が初めてだ。）

ハヤテ

「（そうですか。ところで、犯人達の車は見つかりましたか？）

リイン

「（ああ、今南西の方角を逃走中のよつだ。）」

ハヤテ

「（わかりました。）飛ばしますよーーー」

ハヤテはさすがにスピードを上げた。

デギヤン…

「ハハハ、今日はラッキーでーだぜー！」いつも楽に誘拐できるとはない！

「本当だな、兄貴…！」

美希
「ん~、ん~…」

ギュオオオオ…

「ん？ 何だ？」

「何の音だ？」

美希
「？」

美希が横の窓から顔を出して上を見てみると、空を飛んでいるハヤテの姿が見えた。

美希

「んん！？（ハ、ハヤ太君！？空を飛んでるの！？）」

ハヤテ

「車の前のボンネットに何かを突き刺せば、動きを止められそうですね。」

ソニア

「なら、ここは私に任せてくれださい、ハヤテ君。」

そう言つてどこからともなく巨大な十字架を出したソニアは、車のボンネットめがけて放り投げた。

ドガツ！！

「つおおおおおーつー！？」

「あ、兄貴ーつー！」

美希

「んーーー！」

車は急停車した。

ハヤテ

急停止した車に、ハヤテ達が追いついた。

「さあ、もう逃げられませんよーーー！」

ソニア

「美希さんを放しなさいーーー！」

「フン、そっぽいとかよ・・・・

そう言いつと、2人組は美希を腕に抱え、ナイフを突きつけた。

ギラッ！！

美希

「んんっーーー！」

「」のお嬢ちゃんにケガさせたくなかつたら、そこを退きな。

ハヤテ・ソニア

「くっ・・・・」

伊澄

「手が出せません・・・・」

理沙

「（親友の美希が大ピンチだというのに、私には何もできないのか・・・・？頼む、神様・・・美希を助ける力を、この私に『えてくれ！ーーー』」

その時、ナイフが犯人の手を離れ、1人の頬をかすった。

「がつーーー？」

美希はそのスキをつき、もう1人に体当たりをした。

ドンッ！！

「！」

美希はハヤテ達の元に駆け出した。

タタタ・・・

ハヤテは素早く美希を抱え、犯人達から引き離した。

ハヤテ

「観念しなさい!!」

こうして、犯人達は逮捕された。

その後

「助かつたよ、みんな。」

ハヤテ

「いえいえ、困つた時はお互い様ですから。」

ソニア

「それにしても理沙さん、スゴかつたですね！」

理沙

「え？」

ハヤテ

「ナイフを念動力^{サイコキネシス}で動かすなんて・・・」

理沙

「そ、そうだな、アハハ・・・（私は）これからもこの力で、親友達を守つていくんだ。ありがとう、神様・・・」

もちろん、理沙に念動力を授けたのは、神様などではない。

理沙に念動力を授けたその人物は、ハヤテの横で人知れずクスリと笑っていた・・・

完

(後書き)

ここまで読んでくれてありがとうございました。
理沙に念動力を授けたのは誰なのか?
この話を最後まで読んだ皆さん、気づいたかと思します。
良ければ感想もくださいね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0391c/>

1人の巫女と不思議な力

2010年10月28日08時49分発行